

編集後記

『戦史研究年報』第12号をお届けいたします。

第12号の編集にあたっては、幾つか新しい試みを実施しております。その一つとして「戦史研究座談会」を掲載いたしました。従来の論文とは異なり座談会形式の内容となりましたが、戦史研究の権威である各先生方の闊達な議論は、興味深いものになったのではないかと考えております。

「史料紹介」は、日本のシベリア出兵実行開始の根拠となる文書である「満洲里方面派兵の件（閣議提出案）」及び日本海軍最後の英国派遣となった「軍艦『足柄』の英国観艦式派遣に関する史料」を掲載しました。

「論文」は、戦史部所属研究者による平成19年度調査研究成果の中から、論文2篇、研究ノート1篇、計3篇の掲載となりました。

庄司論文は、開戦から戦後の戦史編さんまで続く陸海軍の認識の違いを論じています。岡田論文は、誘導弾導入の経緯と日米の思惑について論じられています。本論文の誘導弾をステルス戦闘機に置き換えれば、次期主力戦闘機選定に係る今後の展開を予測する一助となるのではないのでしょうか。川井所員の研究ノートは、軍艦「足柄」の派遣準備から帰国までの諸活動についてまとめたものです。巻頭の「史料紹介」と併せてご覧下さい。

「研究会記録」は、防衛研究所戦史部が平成20年3月に実施した研究会において米国海軍兵学校マーカス・O・ジョーンズ教授が発表した論文を英文のまま掲載いたしました。第二次世界大戦におけるドイツの潜水艦戦を知る上で大変参考となる論文です。

「国際会議参加報告」は、イタリアのトリエステにおいて開催された第34回国際軍事史学会大会の概要及び同大会で羽生所員が発表した原稿を掲載しました。

「活動報告」は、平成20年に戦史部が実施した諸活動について記しましたが、新たな試みの一環として、国外散逸史料収集に派遣された所員の所感を掲載いたしました。

最後になりましたが、本号発刊のために協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

(羽生 光俊)